ありますが、施餓鬼会はこの両方をあわせ持つのです。つまり、それは「身近な誰か」だけでなく、「名もなき誰か」にも想いを馳せる行事といえます。

この冊子では、施餓鬼会の由緒や作法だけでなく、行事にまつわる仏教の考え方（「布施」「慈悲」「縁起」）を紹介していきます。「施すこと」は「手放すこと」であり、また「つながり直すこと」でもあります。そして、「誰も取り残さない」という仏のまなざしは、決して遠い理想ではなく、私たちも日常の中で少しずつ実践できるものです。ページをめくりながら、あらためてご自身の「誰」を思い浮かべてみてください。その「誰か」を問うことこそが、あなた自身の施餓鬼会の出発点なのです。

1　施餓鬼――見えない隣人たち

①施餓鬼会のはじまり

施餓鬼会の起源は、仏教経典に説かれる一つの物語にさかのぼります。お釈迦さまの弟子である阿難尊者の前に、ある夜、口から炎を吐く恐ろしい餓鬼が現れ、「お前は三日後に死んで、私と同じ餓鬼の世界に生まれ変わる」と告げました。驚き恐れた阿難は、お釈迦さまのもとへ駆け込み、どうすればよいのかを尋ねます。するとお釈迦さまは、餓鬼たちに飲食を施し、「仏（仏さま自身）・法（仏さまの説かれた教え）・僧（仏さまの教えを信じる人々）」の三宝を供養する作法と、少量の供物を無限に増やすとされる「陀羅尼（呪文）」を授けました。阿難がその教えのとおり実践すると、餓鬼たちは苦しみから救われて安らかな世界へ導

④尽きることのない灯

『維摩経』というお経には「無尽の灯」という有名なたとえ話があります。一つの灯りから別の灯りに火を分けても、もとの灯りは暗くなりません。むしろ、次々と増えて、あたりをより明るく照らし出します。このたとえは慈悲や布施の本質を実にわかりやすく示しています。思いやりや親切を誰かに分け与えても、自分の中のそれが減ってしまうわけではありません。むしろ、その行為を通して自分の心も少しずつ明るくなっていくのです。慈悲は奪い合うものではなく、分かち合うものなのだということを、このたとえは教えてくれます。

4 縁起——世界とつながり直す

私たち一人ひとりの小さな慈悲行の大切さを見てきました。たとえささやかではあっても、その行為は遠くの誰かにまでつながっていきます。不思議ですね。その〝不思議さ〟の答えが仏教のもう一つの大事な教え「縁起」であり、私たちが世界と「つながり直す」ための視点でもあります。

①「縁起」の視点で世界を見る

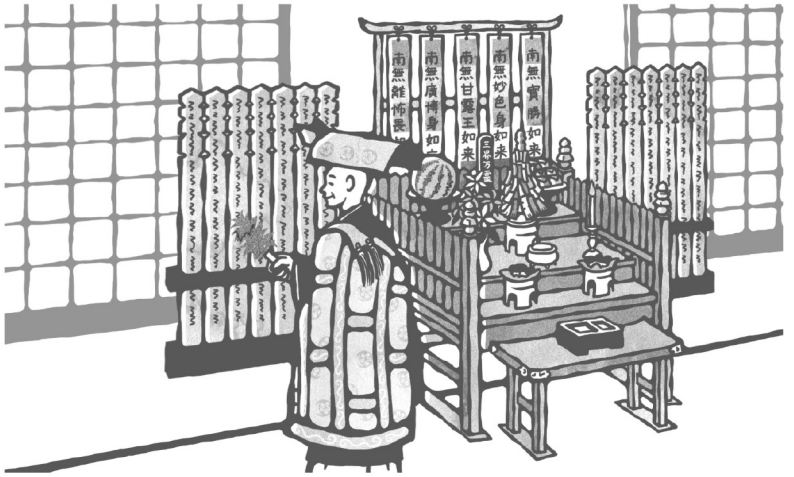
縁起とは、すべてのものは単独で存在しているのではなく、さまざまな条件や関係で成り立っているという考え方。たとえば、一輪の花が咲くためにも、太陽の光や雨、土の栄養、人の手入れなど、無数の条件が重なっています。どれか一つが欠けても、その花はそこに咲いていません。私たちの命も同じです。縁起とは「すべてはつながっている」というあり様に目を向ける教えであり、その気づ

こには「三界万霊」と書かれた位牌が祀られてきました。「有縁無縁」と追記される場合もあり、これは「ありとあらゆる世界のすべての精霊」という意味。そこに含まれるのは、自分のご先祖さまだけではありません。名前も知らない誰か、行き場を失った精霊、人間以外の生き物たち…。施餓鬼会では、「○○家先祖代々」というように、参列者に縁ある方々を供養しますが、どうしてもそこから漏れてしまう存在がいます。三界万霊には、「私の知らないところで寂しい思いをしているあなたへ」という、すべての命に心を向ける願いが込められています。

②五如来幡と水向け

しつらえの中で、色とりどりの幡が掛けられているのを見たことがある方もいらっしゃるでしょう。これは「五如来幡」とよばれます。

五如来と総称される「宝勝如来・妙色身如来・甘露王如来（＝阿弥陀仏）・広博身如来・離怖畏如来」という仏さま方を表し、それぞれを象徴する五つの色（緑・黄・赤・白・紫など）で、あらゆる方角にくまなく及ぶ仏の智慧と慈悲を表します。



餓鬼は喉が細く、普通の飲食では苦しみから救われないとされてきました。そこで仏のはたらきによって喉が広げられ、供えられた食べ物や水が受け取れるようにとの願いが込められているのです。

施餓鬼会では「水」も重要な役割を果たします。施餓鬼棚で餓鬼に水を手向ける「水向け」と僧侶による「読経」。これらが合わさることで水は清らかな「甘露」となり、餓鬼の喉を潤して、燃えさかる貪りの火を鎮めるとされています。

③塔婆と三宝供養

このように施餓鬼会では、さまざまな